

2020年11月1日 佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書13章1～17節

説教題：足を洗う

50年近く前になりますが、「浅間山荘事件」という事件がありました。連合赤軍のメンバーが浅間山荘に立て籠もって、警官隊と銃撃戦を繰り広げました。この事件が衝撃的だったのは、彼らが銃撃戦を繰り広げたということよりも、その前に、彼らが自分達の仲間14人をリンチによって殺していたということでした。なぜ殺したのか。「裏切り」に対する憎しみのためだったと言われます。信頼していた仲間が裏切って逃げて行きます。そうすると彼らは「こいつも裏切るのではないかと疑うようになって、裏切る可能性のありそうな者を殺して行ったというのです。信頼していればこそ、裏切りに対する憎しみは強いのだと思います。そして、裏切られた傷というのは簡単に消えるものではないでしょう。しかし、裏切りに対して全く違う対応をされたのがイエス様です。今日の箇所は—（「主の洗足」として有名な箇所ですが）—そのイエス様の様子を記す箇所です。

弟子達は気づいていませんが、イエス様の十字架が目の前に迫っていました。イエス様と弟子達は「最後の晩餐」のために、ある家の二階座敷に上がりました。当時の人々の履物は、薄っぺらい革の靴底に紐のついたサンダルです。道路は舗装されていませんから、道を歩けば、埃で足が汚れました。雨が降れば、泥だらけになりました。それで家に入る時には、その家の奴隷がお客の足を洗いました。しかしこの時、イエス様一行の足を洗う奴隷がいませんでした。それで、彼らは、そのまま二階座敷に上がって行きました。二階座敷には、タライと手ぬぐいがありましたが、足を洗う奴隷はいません。だから誰かが、足を洗う役を買って出なければならなかったのです。しかし誰もそれをしません。それで足を洗わないまま食事を始めたのです。やがて食事の途中、イエス様が立ち上がって、弟子達の足を洗って、手拭いで拭かれた、というのが「洗足」の出来事です。

「洗足」は何を教えるのでしょうか。内容と適用をお話しします。

## 1：内容～「洗足」に表された主の愛

1節「この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された」(1)。悲惨な十字架の直前も、イエスは弟子達を愛しておられました。しかしイエスが愛しておられた弟子達はどのような状況だったのでしょうか。この後、ゲッセマネに行くと、そこでイエス様は逮捕され、十字架に架けられて行きます。その時、弟子達は、イエス様を捨てて逃げるのです。ペテロは「あなたのためにはいのちも捨てます」(37)と言いますが、危険を感じると「そんな人は知らない」(マタイ 26:27)と、3度も否定するのです。イスカリオテのユダは、悪魔に動かされてイエス様を売り渡します。イエス様は、それらのことご存知でした。イエスが弟子達を愛されたというのは、その彼らの裏切りを見ながら極みまで愛されたということです。その愛が形になったのが「洗足」です。イエス様は、上着を脱いで僕の姿を取り、弟子達の足を1人1人洗い、手拭いで拭って行かれました。ペテロは「決して私の足をお洗いにならないでください」(8)と言いました。「イエス様に足を洗

ってもらおう等、とんでもない」と思ったのです。しかしイエス様は「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません」(8)と言われました。どういう意味でしょうか。

ある本にこうありました。「夫婦の関係でも、隣人との関係でも、私達は自分の過ちについては、何とかそれを適当に逃れようとする。しかし他の人の愚かさや、小さな過ちに対しては、宥赦出来ない」。他者の過ちを赦せないということでしょう。イエス様は、赦すこと、赦し合うことを教えられました。しかし私達は、その御心に生きることが難しいのです。「赦し」1つをとっても、神に喜ばれるように生きることが出来ない。三浦綾子さんは言いました。「人間は生涯の内に様々の罪を犯します…心の中に人をなじり、侮辱し、驕り、高ぶり、情欲を抱き、人を羨み、はては人の死を願うことさえあるのではありませんか…自分の罪はこれだけだと、自分の中から取り出せるものではないのです。人間の存在そのものが罪なのです…」。私達は大人なり小なり自己中心、裁き、妬み、そういうものを抱えているのではないのでしょうか。その罪が、私達を神の前に聖くない者に行しているのです。聖書にあります。「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」(ヘブル9:27)。つまり私達は、裁きの場の有罪判決に向かって歩いているのです。有罪ならば、その先には永遠の滅びが待っている、それが聖書の語る真実です。しかし自分の罪を自分でどうにか出来るのでしょうか。私の友人は「清くなりたい」と思って1年間水を被りました。「何も変わらなかった」と言いました。自分ではどうにも出来ないのです。イエス様はその人間を救おうとされたのです。イエス様と私達の関係、それは、イエスが私達の罪を十字架の血によって拭取り、洗い聖めて下さる、そういう関係なのです。「洗足」はその象徴です。弟子達は、数時間後にイエス様を捨てて逃げてしまうのです。その彼らの罪を拭って行かれる、それがイエス様の愛です。

私達も、イエス様に相応しく生きているわけではありません。罪を抱えて生きているのです。しかし弟子達を極みまで愛されたイエス様は、そんな私達をも極みまで愛して下さるのです。なぜなら私達もイエス様のものだからです。キリスト教の核心は「私にも罪がある、しかしその私が赦され、神に裁かれる者ではなく、受け入れられる者になるように、イエスが十字架で血を流して私の罪を拭い去って下さった」ということです。誰でも「私にも罪があります。辛い過去があります。私の罪を赦して下さい」と言うなら、イエス様が「神に受け入れられる者」にして下さるのです。

だから大事なことはイエス様の愛を拒否しないことです。「私はイエス様に足を洗ってもらう必要はない、私には罪はない」と言ったり、あるいは—(教会で罪の話を聞いて「自分の罪ぐらい自分で何とかするわよ」と怒って教会を出て行かれた方があったそうですが)—私達が言うなら、イエス様の愛を受け取れないのです。

神に受け入れられる祝福、それはもちろん、日々の現実にもあります。私がかつてお会いしたご高齢の兄弟は「先生、キリストは凄いな」と言っておられました。沢山の神の恵みを経験されたのでしょう。しかしその祝福は何より、私達の最後の、最大の試練である、死の時にはっきりするのです。ある先生が入院中の女性実業家の方を訪問しました。その方は「先生、私は死ぬのです。恐ろしい。助けて下さい」と言われたそうです。一方、ご高齢の兄弟は亡くなる直前「病の喜び、まことのいのちを信じる。死ぬことの喜び、よみがえりの…二倍のものを主の手から受

ける。何と言う信仰の喜び」と走り書きして、天国の命を確信して、天に帰って行かれました。何という違いでしょうか。十字架を「私のためでした」と受け取りさえすれば、生きるにも、死ぬにも、神が私達を恐れから解放して、希望と平安を与えて下さるのです。天の御国に永遠に生きる者にして下さるのです。

## 2：適用～「洗足」が語る仕える祝福

この時、誰も他の人の足を洗おうとしなかったのは、自分を僕の立場に置くのが嫌だったからです。プライドが許さなかったのです。イエス様はかつて言われました。「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり…」(マタイ 20:28)。「私も仕えるために来たのだ」と言われたのに、彼らは分かっていたいなかった。それでイエスご自身が僕になり、弟子達の足を洗われたのです。足を洗い、拭き上げた後でこう言われました。「主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです」(14)。

私達は皆、自我を持っています。その自我は、仕えるより、仕えられることを喜ぶ、心地よく思うのです。ある先生の本にこうありました。「九州男児の私は、女性は男性に尽くしてくれると信じ、結婚すれば簡単に幸せになれると確信していました…家内の父親は、朝一番に起き、家事を手伝うのが日課でした。当然、家内は、私もそのように手伝うと信じていました…結婚後、私は仕えない家内に驚き、家内は手伝わない夫に驚きました。お互いに自分が正しく、相手が悪いと思い込んでいたから、大事件の勃発です」。お互いに相手に仕えて欲しかったのです。でも、それが私達を苦しめているのではないのでしょうか。「仕えられたい」と思っても、人が仕えてくれないと不満が出る、あるいは「自分はこれだけして上げたのに、あの人は分かってくれない」という不満が出て来る。イエス様は「主であり師であるこのわたしが…」(14)と言われました。

「師である」ということは、私達はイエス様の弟子であるということです。弟子は「師」の真似をして生きるのです。イエス様が僕だったら、私達はもっと僕にならなければならない、もっと仕える者にならなければならないということでしょう。そして、「あなたがたがこれらのことを知っているのなら、それを行なうときに、あなたがたは祝福されるのです」(17)、そこに祝福された人間関係があると言われます。確かに難しいです。しかし先程の先生の言葉はこう続きます。

「次第に私は正義を振りかざすよりも、受容し、愛することを学びました…九州男児の私が、喜んで家内のために食後の片づけをし、ゴミ捨てまでも出来るようになりました。ついに…私は幸せな人生を手にいれました」。仕えるところで祝福を見出したと言われるのです。

もちろん「仕える」というのは、何でも「ハイハイ」と人の言うことを聞くことではありません。それはその人の祝福を考え、愛と忍耐を持って誠実に関わって行くことです。親に、子供に、家族に、隣人に接して行く時も、「仕える」という意識は大切なのではないのでしょうか。少なくとも私達を謙遜にしてくれます。新しい動機づけをしてくれます。但し、難しいです。しかし、私達自身がイエス様に足を洗って頂き、拭いて頂き続けている者です。「私はイエス様の弟子だから…」というところに立つ時、私達も、仕える祝福に向かう力を頂けるのではないのでしょうか。

イエス様に極みまで愛されたペテロは、やがてどうなったのでしょうか。「クオ・ヴァディス」

という映画では、ローマのクリスチャン達に対するネロの迫害が熾烈を極めて来て、クリスチャン達は何とかペテロを逃がして、他の場所で伝道してもらおうとします。ペテロは説得されて街道を供の少年と逃げます。ところが彼は、向こうからローマに向かって近づいてくる太陽の輝きを見ます。その輝きの中を復活のイエスが歩いておられるのです。ペテロは跪いてイエス様の足を抱くようにして言います。「主よ。どこにおいでになるのですか」。イエスは言われます。「あなたが私の民を捨てる時、私は再び十字架にかけられるためにローマに行く」。しばらく地面に蹲っていたペテロは、起き上がると、踵を返してローマに向かって歩き始めるのです。ローマに帰り、イエス様に会ったことを語りながら、皆を励まします。仲間に仕えたのです。自分もイエス様に極みまで愛されたので、自分もまた主を愛し、隣人を愛し、仕えて行ったのです。私達も、同じように愛されている者です。大きなことは出来ない、でも身の周りの小さな人間関係から、イエスの教えて下さる、約束して下さい、祝福の経験に踏み出す者でありたいと願います。